

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	コロナ禍における2021年度初修中国語教育の試み：広島大学TA制度の活用による初修外国語教育への挑戦
Author(s)	荒見, 泰史
Citation	広島外国語教育研究, 25 : 221 - 237
Issue Date	2022-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/51972
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051972
Right	Copyright (c) 2022 広島大学外国語教育研究センター
Relation	



コロナ禍における2021年度初修中国語教育の試み

— 広島大学 TA 制度の活用による初修外国語教育への挑戦 —

荒見 泰史

広島大学大学院人間社会科学研究科

1. はじめに

広島大学の初修外国語教育では、学生たちが学生生活の中でより効果的かつ継続的に外国語、外国文化を学べるよう、様々な教育システムを検討してきた。これまでも長く運営されてきた授業時間週4コマ（8時間）のインテンシブコース（ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、韓国語の5コース）や、その後も継続学習を促すために開始された外国語トライリンガル特定プログラム（インテンシブコースと同じく5言語で開講、以下「トライリンガル」）もそのように開発されてきたシステムである。このうちの「トライリンガル」とは、特定プログラムという制度を活用して開設されたもので、学生は学士課程プログラムと別に独立したプログラムとして選択し、卒業時にトライリンガルの修了証書を取得できるというシステムで、2018年度より開始され、初修外国語を2年次以降も継続して履修するよう促すことに成功した（2020年度第一期修了生は28名（うち中国語9名））。さらにトライリンガル修了目標としての語学の到達目標（ドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語はB1、中国語はC1）はほぼ達成できており、外国語学部、外国語学科のような専攻を持たない本大学で、初修外国語を継続的に学べるシステムとして一定の成功を取めていると自負している。

ただ、毎年入学する2,500名の入学生のうちほぼ全員が履修する初修外国語の中で、インテンシブコースに進む学生は例年100名前後と少なく、トライリンガルでは2018年度63名（うち中国語20名）、2019年度104名（うち中国語44名）、2020年度56名（うち中国語21名）（トライリンガルは2年次開講なので、ここに言う2018年生は2017年度入学生である）とさらに少なく、さらに言えば一年次にインテンシブコースに参加できる学生が、時間割の上で理系学部学生には不利であり、トライリンガルにまで進もうとしても一定の難しさがあつた。また本論にも言うように初修外国語を取り巻く問題は多く、それらを改善していく必要がある。

こうした現状に対する改善のため、2021年度より新たな試みをいくつか行うことになった。その改善の手法の主たるものが、広島大学のTA（Teaching Assistant）制度などを活用し、多くの中国語ネイティブの留学生を教員或いは教育補助員として授業内に配置し、学習言語との接触機会を増やす試みである。これにより学習者の外国語で会話する機会を飛躍的に向上させ、トレーニングを中心とする授業とすることを目指したのである。

本稿は、その試みの過程と、成果についての報告である。

2. 準備的段階としての2020年度の試み

周知の如く、前年度の2020年度はコロナウイルス蔓延という社会全体が受けた衝撃の中で、授業実施の上でもたいへんな困難と混乱の年であった。ただ、今日までに一年以上を経てその教育現場における変化を考えた場合、ICTへの適応能力は平均値が格段に向上したとすることができる。同時にそこには格差が明確に表れたことは否定できず、学生間の格差ばかりではなく、対応

能力における教員間の格差が生じたことも否定はできない。とはいうものの、これらを支援する通信技術やそれに対応するソフトウェアの開発も極めて速やかで、教育のための設備としてかなり安心感を以てこれらの技術に頼ることができるようになったこと、多くの教員が率先してこれらを利用するようになったことは事実であり、今後の教育に大きな変革を与える契機となったと言えるだろう。筆者もまた試行錯誤ではありながらそれらの技術を少しでも取り入れようとしてきた教員の一人である¹⁾。

そのような2020年度の試行錯誤の中で、大きな収穫があったとすればビデオ会議システムを利用した同期型授業と収録したビデオを編集して用いるオンデマンド型授業を経験できたことである。現在振り返ってみればまだまだ未熟で初歩的な方法を体験した程度ではあったが、当初はビデオ編集ではMicrosoft社のPowerPointの録画機能を利用するのが最も簡便で、多くの教員とともにこれを使用した。その後にはより高い効果を考え、筆者は動画作成ソフトWondershare社のFilmoraを活用してそれをさらに加工することを覚えた。これにより自分で撮影した動画や自作のイラスト、アニメーションなどを適宜取り込み、さらに字幕を付けることもでき、より効果的な教育方法を試みることができた。これを学習支援システムBlackboardやMicrosoft社のstream機能、またYouTubeを利用して配信し、個人の力でオンライン教育システムのまねごとができるようになり、授業に活用することができるようになったのである。このようなICT技術は数年前には既に存在しつつも多くの教員には顧みられずにいたものが、コロナ禍という難題の中で活路が見出されたということになるだろう。まさに「100年に一度の災厄の中で目の前の1000に一度の技術革新気づく」といった表現が適切なところである²⁾。また、こうした技術により教員間での合同授業や共同作業が試みられ、学んだ技術を教員間で共有するようになったことは、教員のICT技術の活用能力を向上させるよい機会になったのではないか。さらに言えば、年長の教員がICT技術に長けた若年の教員から学ぶ機会も増え、世代を超えた闊達な議論の形に変えたという点でも大いに役に立ったのではないか。少なくとも我々の身近な教員組織では、こうした技術をビデオ会議システム上で教えあう機会や、研究会への参加も盛んであり³⁾、技術習得のためにたいへん有益であった。

筆者の担当する広島大学インテンシブ中国語の教育における具体的な対策についてはすでに別稿があるが⁴⁾、その要旨を以下に簡単にまとめておこう。

2020年度に筆者が担当したクラスと学生数は、中国語インテンシブコース3クラス履修学生全100名中、2クラス77名である。それぞれ週4回で1回90分(120分－休憩時間30分＝90分と計算)学習するカリキュラムなので、各クラスの担当は他に客員教員3名がそれぞれ負担した。その担当と時間割は以下のとおりである。

表1 2020年度筆者担当の中国語インテンシブ連動クラス時間割とほかの担当者

	月曜日	火曜日	木曜日	金曜日
クラス① (43名)	9, 10限 インテンシブ中国語 IA (客員教員 A)	5, 6限 ベーシック中国語 (荒見泰史)	5, 6限 ベーシック中国語 (客員教員 B)	9, 10限 インテンシブ中国語 IA (客員教員 C)
クラス② (34名)	9, 10限 インテンシブ中国語 IA (荒見泰史)	7, 8限 ベーシック中国語 (客員教員 A)	7, 8限 ベーシック中国語 (客員教員 B)	9, 10限 インテンシブ中国語 IA (客員教員 A)

*他、週1回TA (TF1名, QTA1名) がそれぞれのクラスを担当

それぞれのクラスがほぼ同じ計4名の教員で担当し、ここにTFが1名、QTAが1名、それぞれのクラスに週1回つくよう配置された（広島大学のTA制度については後述）。

この6人のメンバーで『新概念漢語』という筆者の実験教材を統一教材として使用した。本教材に関しては、2017年度から授業用のパワーポイントや補助教材を使用しており、新任の客員講師一名以外はTAも含めてこの教材の使用経験があった。

2020年度は4月初めになって全面オンラインとなることが決定されたため、上述の6名で相談のういで、教育効果を下げないように授業方法の工夫が検討された。その骨格となるのは以下の数点である。

- ①対話練習の時間を確保する（30分以上を理想とする）。
- ②対話練習に必要な程度のパタン・プラクティスの時間を確保する。
- ③漢字練習（他言語学習で言う単語練習に相当）を行う。

このうちの①は、対話の中で文法や単語をパタンとともに記憶する筆者の一貫して取ってきた手法である。これによる効果は単に記憶を促すだけではなく、授業内の多くの時間をすべての学生が参加する会話練習に割くことで学生の注意を授業に引き付けておくことができることである。教材も学生同士の会話に適した内容が文法シラバスに合わせて集められており、学生は会話に参加することによる高揚感を味わうこともでき、これまでの成果より見ても有効な教育法であることは実証できる。

②は①に導くための発話の練習であり、発声させ、発音の矯正などを行うためにも重要である。

発音に関しては③も同様である。音節言語ともいわれる中国語は、極端に言えば一音節一語の組み立てによる言語であり、故に各音節の音と意味を分別する能力は極めて重要である。漢字を多く知る日本人が中国語を学習する場合、漢字と音と意味を統合的に理解できるようになることは言語習得の早道になると考えられるのである。

以上の3点を譲歩することなく全面オンラインで授業を行うために、2020年4月の段階でBreakout session機能の充実していたZoomのビデオ会議システムを使用することになった。また、統一的な文法理解、単語学習は自主学習でも対応が可能という理解から、コンテンツを作成して対応することになった。ただ、自主学習は学生の意志に頼る部分が高く、個人差が生じることを懸念して、自主学習の時間を授業時間内に一定時間設け、その直後にZoomによる同期型授業を行うことにより、学習程度もチェックできるようにした。つまり、コンテンツは事前に学ぶこともでき、また事後に復習としてみることもできるが、授業時間内に固定時間としてコンテンツを見る時間があり、Zoomによる会話練習もそれに合わせて行うようにしたのである。

作製した1課当たりのコンテンツは以下のように6つの部分に分けることにした。ビデオがあまり長くなると視聴者の集中力が続かないとの指摘を受けていたからである。

- (1) ポイント（文法指導）
- (2) 単語
- (3) 置き換え練習用単語
- (4) 本文練習
- (5) 漢字練習
- (6) 復習用対話練習

授業時間内には表2のようなコンテンツの視聴と同期型の授業が行われた。なお、前にも言うように同教材にはすでにPPT教材があったため、当初これに録音してMP4形式にダウンロード

表2 中国語インテンシブ連動2クラスの授業内容

	月曜日	火曜日	木曜日	金曜日
クラス①	9, 10限 コンテンツ (1), (2) 配信 / 発音練習 (1), (2) 配信	5, 6限 コンテンツ (3), (4) 配信 / Zoom による 同期型授業 (50分)	5, 6限 Teams による同期型 授業 / 書き取りテスト (計90分)	9, 10限 コンテンツ (5), (6) 配信 / 確認テスト (/Zoom による同期 型授業 (50分))
クラス②	9, 10限 コンテンツ (1), (2) 配信 / Zoom による 同期型授業 (50分)	7, 8限 コンテンツ (3), (4) 配信 / 発音練習 (1), (2) 配信	7, 8限 Teams による同期型 授業 / 書き取りテスト (計90分)	9, 10限 コンテンツ (5), (6) 配信 / 確認テスト (/Zoom による同期 型授業 (50分))

* 網掛け部分は同期型授業の部分。

するという平易な方法をとることができた。

各課の (1)～(6) それぞれのコンテンツは平均15分程度で、1回の授業当たり2本約30分を視聴するようになっている。時間割の関係で金曜日を各課の初めの日と定め、週の最後となる木曜日授業では完全同期型の授業とし、重点的な復習と習得度のチェックが行われる形とした。クラス①の月曜日授業とクラス②の火曜日授業ではネイティブ教員の発音練習をそれぞれ適宜入れている⁵⁾。

以上が2020年度の概要だが、総じて言えば2019年度と比べて教育効果は下がることなく堅調な結果が現れた。印象としては、教室の対面授業での学生同士のなれ合い的な雑談や、ペアワークに伴う移動時間の減少が好結果に結び付いたとも思われたが、中国語ネイティブの院生がTAとしてBreakout session中に巡回し、会話練習に加わることによる効果が大きく出たものと思われた。上は従来通りの2クラスとして運営するという建前からクラス①とクラス②で二重になっているが、コンテンツの完成により、これらを統合してさらなる効率化を検討することへの検討の必要が感じられた。かくて、2021年度に向けて、TA制度の活用と、後述するような留学生による授業ボランティアを増加させることを骨子とした授業計画が検討されるようになったのである。

3. 広島大学のTA制度と授業ボランティアについて

上に言うように、大学語学教育、とくに初修中国語教育におけるこれまでの経験により、中国人留学生が学生同士のペアワーク活動に参加した場合の効果は検討に値すると思われた。とくに広島大学では独自の3段階のTA制度を確立し、教員になるための道筋ともなっており、これらを組み合わせた教育が期待される場所である。加えて言えば、学部の留学生が増加している今日、学部生から大学院博士課程前期、博士課程後期へのステップアップを可視化することは、語学補助教員確保という面だけではなく、学生自身のステップアップの道筋と言う意味合いでも有効であると思われる。かくて、広島大学のTA制度に更にもう一段階加えるための工夫を行った。以下にそのステップについて述べておきたい。

初めに広島大学のTA制度について簡単に紹介しておく。

広島大学では、ステップアップ型のTA制度を取り入れており、学部学生のPhoenix Teaching Assistant (PTA) に始まり、博士課程前期以上の学生で教員の補助として授業に関する一定の作

業を行う資格を持つ Qualified Teaching Assistant (QTA), そのステップを経た後に博士後期課程学生が[大学教育入門]などの教育を経て着任できる Teaching Fellow (TF) の3段階を順にステップアップできる制度となっている。これにより段階的に教員としてのスキルを学んでいくというものである。

以下は広島大学ホームページ上の TA 制度の説明である。

何かを教えるという行為には、様々な段階と側面があります。例えば、学び手に対して、学ぶ理由、道筋を示し、学び手の知識と関連づけながら新しい知識を紹介し、そして身につけた知識を使って学び手が新しいことを生みだすことを促す。ティーチング・アシスタント (TA) はこのプロセスに関わり、学生が主体的な学び手として、より深い学びを経験できるよう支援する役割を担います。

それは、科目が扱う専門知識を持ち、教員の教育的意図を理解し、学生の学びの状況を判断して動くことを意味します。つまり、TA として大学教育に関わることで、専門知識が深まり、コミュニケーション能力が高まることが期待できます。

平成28年度から始まる新しい TA 制度、HirodaiTA では、TA を3階層に分け、TA のみなさんが徐々に教育活動への理解を深め、学習支援方法を身につけ、自立した教育者としても活動できるよう後押ししていきます。⁶⁾

さらに TF, QTA, PTA についてそれぞれ以下のように説明している。

TF (教育活動を自律的に実践するステージ)

先生になってみよう

QTA の経験、「大学教員養成講座」の修了が要件の TA です。教員の指導のもと、シラバスの作成や単独授業の実施、成績評価の原案の作成などを行います。教育活動を自立的に実践するステージです。

QTA (教育活動を体験するステージ)

先生と学生の橋渡しをしてみよう

QTA 資格取得研修会の受講が要件の TA です。教員の教育的意図を理解し、ディスカッションのファシリテーションや実験のデモンストレーションなど、授業内の学習活動の支援を積極的に行います。教育活動を体験するステージです。

PTA (教育活動の入り口)

先生の目線で見てみよう

資格要件のない TA です。授業資料の印刷や出欠確認など、教員が授業を円滑に進めるための簡単なお手伝いをします。教育活動を知る入り口です。

この制度に基づけば、担当教員の指導の下に、博士課程後期学生が TF として教壇に立つことが可能となっている。将来教員になることを目指す学生にとっては、教室経営のためのたいへんよい学びの機会となろう。また、博士課程前期学生は QTA として「ディスカッションのファシ

リテーションや実験のデモンストレーションなど、授業内の学習活動の支援を積極的に行うところまでが認められている。つまり QTA は教壇に立って教員の代わりとして講義を行うことはできないが、教員、TF の下で学生に対してペアワークのデモンストレーションをすることができ、また実際にペアワークに参加することもできる、と理解できる。言うまでもなく QTA となれば授業時間内に教室内で教室運営の状況を観察することもでき、将来的に博士後期課程に進学して自分が TF になるイメージつかむことができる。いずれの制度も、授業運営の中での役割分担という点では教員側にとっても学生側にとってもメリットがあることになる。

ただ最後の PTA は、学部学生でも努めることはできるが資格要件はなく、教室での演習の手伝いまでは認められていない。語学の授業運営としてはこの点を解決し、できるだけ多くの学部学生の参画を増やしたいと思うところである。広島大学では森戸国際高等教育学院3+1プログラム（以下、3+1）を実施しており⁷⁾、毎年多くの学部留学生が特別聴講学生として広島大学に留学生としてやって来ている。またその学生たちの多くは博士課程前期への進学を希望しており、次年度以降の QTA としての人材としても期待される学生たちなのである。

この点を解決するために、2021年度から教養科目として「国際交流ボランティア演習」という授業を開講することとした。学部留学生は TA 制度として雇用するのではなく、学習の一環として科目として立てるのが適切であるという判断からである。というのも、中国語教育の手法自体を知らない留学生がその手法を学ぶという学習上の意味があること、また作業の内容自体が中国人学生として日本人学生との交流活動が主となること、等の理由による。このため、国際交流の一環として参画するのが適切で、むしろその方が学生同士の関係性から交流も自然に広がり、語学力の向上には好影響があると思われた。結果としては、コロナの影響により2021年度留学生の日本への渡航は難しく、ほとんどの中国人学生が中国に滞在するという困難の中で、学生間の交流をある程度促進することができたことは確かである。

かくて、2021年度の挑戦では、以上のような TA 制度利用学生と教養科目に立てられた新規科目の履修生を組み合わせた授業の取り組みを行うことになったのである。

4. 2021年度中国語授業の構想

筆者たちの教員グループは、広島大学初修外国語教育の中でこれまでかなり高い成果を上げてきたと自負している。それをさらに拡張したいと考えた矢先におこったのが新型コロナウイルス蔓延による混乱であったが、それを機に ICT 化が急激に進み、そこに活路を見出すようになった。またその成功の蔭にあったのが留学生の授業参画であり、それを受けて2021年度の新たな授業計画を立てることになったのである。

こうした改善の背景には、上述では触れてこなかったが、教員の人材確保の難しさも一つにある。1990年代の留学熱、中国経済の好調などを機に中国語学習人口が増加し、それを受けて中国語教員が多く着任したという事情から、教員は平均的にかなり高齢化している。それでいながら日本国内の若手中国研究者数の激減というもう一方の事情があり、地方での教員確保は次第に難しくなっている。このような背景の中、より効果的に大人数教育を進めたいと考えるのと同時に、留学生に TA 制度などで活躍してもらおうシステムを作り、学部生から自前で教員を育成したいとの考えがある。

以上のような背景をもとに、2021年度中国語教育のために「初修外国語 TA 制度案（TA/TF 制度）」として大学に提出した構想調書は以下のとおりである。

・中国語初修外国語の現状

中国語履修者は年々増加し、この5年間希望者が1.9倍に増えている。この増加に対してクラス数を増加させるなどして対応してきたが、広島大学に通勤可能な範囲で中国語教育の経験のある従事可能な人材は限られており、教員探しで苦勞しているのが現実である。また、専任教員もコマ数を増やすことが困難である。

ベーシック中国語は現在（前期）週に25クラス50コマ（霞キャンパスを含む）、夜間が2コマ、インテンシブ3クラス6コマがあり、合計週58コマが実施されている。2020年度の履修者は900名程度なので、一クラス当たり35人程度と語学教育としては少し多めになっている。

・TA/TF 制度の案に至った背景

広島大学ではQTA と TF を育てる制度を構築しているが、現時点では言語の授業に活用されていない。一方、言語教育を学ぶ院生をはじめ、中国人の留学生など、TA/TF として活躍できる院生が多く在学している。また、その学生達は生活のために様々なアルバイトに従事しているが、それは研究や教育との関連性が薄い。

・TA/TF 制度の仕組み

[添付資料1]（以下図1）の通り、TA/TF 制度の場合、複数の TA/TF が一人の主担当教員の指導の下で複数の授業を担当する。主担当教員は授業の設計、教材の選択や準備などを行い、TA/TF はその指導に沿って授業を展開する。授業はそれぞれの教員が直接担当する部分、TA/TF が担当する部分、オンラインで提供する部分からなる。主担当教員は TA/TF 教育の設計、教授法の設計とその評価を担当する。

・TA/TF 制度のメリット

- ①中国語授業の有効な教授法を定め、それに沿って TA/TF を育てることにより、中国語の授業の質が保証され、上昇する。
- ②慢性的な中国語教員不足を解消できる。
- ③TA/TF を担当する学生・院生にとって将来につながる経験になり、生活支援にも役立つので、留学生を募集する要因にもなる。
- ④主担当教員は TA/TF 教育の設計、教授法の設計とその評価を研究対象とし、研究成果を発信すると共に制度の改善に役立てる。
- ⑤中国語で設計した制度を日本語、韓国語にも適用できる。
- ⑥全学から TA/TF を集め、全学の学生を対象に授業を展開するため、広島大学特有の外国語教育方法のモデルになる。

・TF と TA の具体的配置につき

現段階の構想 [添付資料1] では TF と QTA を組み合わせた教育方法を考えている。それは QTA から TF へと段階的に教育内容、授業進行を学んでいくうえで有効と考えるからである。TA が1クラス2名となっているのは、TA がグループワークで学生を制御できる人数(10人程度)から設定したもので、現在のクラスサイズで考えると一クラス30人以上程度なので必要な TF と TA の合計が3名となる計算である。ここでは最も手厚いケースを想定している。

・予算

従来では、客員講師料として5,000円/時間の支出があり、[添付資料1] のように5クラス実施した場合、講師料1コマ当たり2時間で50,000円の支出となる。これに対し、図1のように TA, TF を配置した場合、博士前期生を QTA とし、博士後期生を TF とした場合、TA が1,000

円/時間で一コマ2名なので計4,000円、TFが1,400円/時間なので一コマ2,800円となり、1クラス1コマで6,800円これを5クラス運営すると34,000円となり、最も手厚い指導を行っても現状より22%程度支出を抑え、教育効果を上げることが可能となる。

・**主担当教員**

上記のような方法を運用する場合、TA/TF育成を設計し、実施し、TA/TFを指導して指示を送る主担当教員がいることが不可欠である。そこは、教育方法と教材開発を専門とする教員が必要なので、今後、その新任人事を進める。

・**将来的展開**

中国語で設計した制度を日本語、韓国語にも適用できる。その他の初修外国語の場合、TA/TFの人材がないので難しいが、将来、英語でTA/TF制度を検討するならその参考になる。

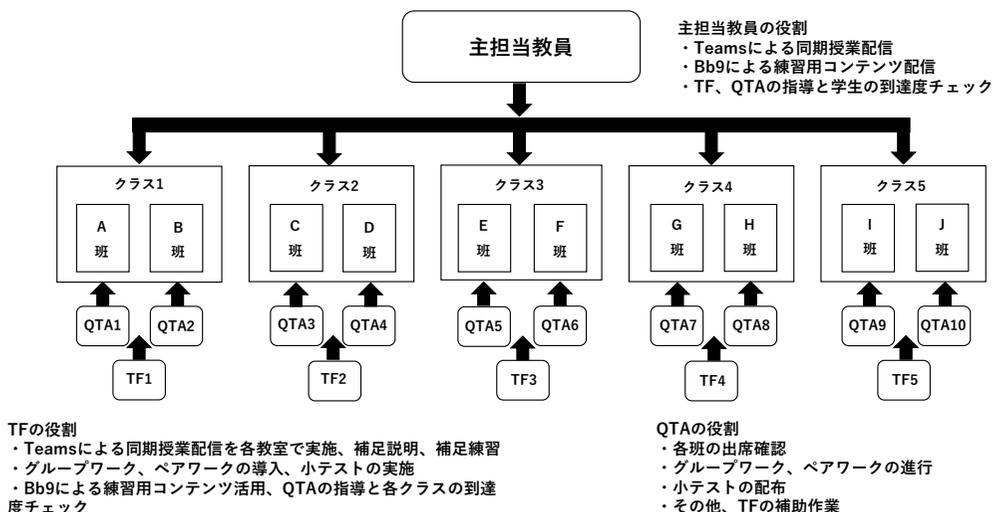


図1 初修外国語（中国語）新指導体制案

以上のような基本的制度設計に加えて、学部学生の教養科目「国際交流スキルアップ演習」履修学生をボランティアとして加え、授業を行うことが認められ、2021年度の初修中国語科目が実際に運営されることになったのである。

5. 広島大学初修中国語2021年度モデルについて

上記の構想に基づき、2021年4月より実験クラスを2つ作り、授業を実施した。そのうちのひとつは理工系を中心とする前期2コマクラス（火曜と木曜の10:30-12:00の週2コマ、以下「理系実験クラス」）学生合計113名（途中再履修者など若干変動有）と、インテンシブ中国語前後期2コマクラス（月曜と金曜の16:20-17:50。別にベーシック中国語週2コマを履修。以下「インテンシブ実験クラス」）である。「インテンシブ実験クラス」は2021年11月現在で授業が進行中なので適宜紹介するのとどめ、以下に「理系実験クラス」を中心に授業内容を紹介していきたい。

「理系実験クラス」は、学生数は第1ターム（4月開始の最初の1/4学期）が113名、第2タームが

112名となった。人数の関係からこれを3つの小クラスに分けて運営することになった。担当教員は火曜日担当が筆者、木曜日担当が山本で、基本的に週各一回を主担当教員が統括することになる。このほかにTFとして3名、QTAを1名とした。本来であればQTAは6名配置する予定だったが、最初のことであり専任教員が常時2名いることに加えて、QTAが多いことによる混乱を避ける、といったことを理由としての配置となった。次年度以降はより多くのTA、ボランティア学生を配置したいと考えている。なお、「国際交流スキルアップ演習」履修学生の配置は学生の渡航予定などから前期期間中は一時見送ることになり、10月から改めて「インテンシブ実験クラス」の方に9名の学生が参加し、効果をあげている。

さて、4月開講の「理系実験クラス」では、新たに Breakout session など機能の充実した Teams を使用して授業を行うこととした。その理由は広島大学が Microsoft 社と包括契約を結んでいること、Teams であればクラスで使用する資料をストックしておくこと、出席確認がしやすいこと、試験として使用する予定の Forms と連動させるのに便が良いことなど様々あげられるが、我々が最大のメリットとして考えたのは一つの会議の中に複数の会議室が置ける機能があることによる。この機能は主担当教員が一つの教室として運営し、その中の小教室でTFがトレーニングを行うという意識づけをする上でも好ましいと思われたのである。のちに機能が充実したために、さらに課題提出、成績管理の機能も使用できるようになり、結果としても Teams で授業を行ったメリットは十分にあったと考える。

実際の授業では、①【大教室】導入と復習、②【小教室】読み上げ練習⇒【Breakout session】ペアワークによる会話練習、③【大教室】主指導教員による解説、④【小教室】TFによる個別練習⇒【Breakout session】ペアワークによる会話練習、⑤【大教室】まとめ、のように毎回おおむね同じリズムで行われる。TFの主な業務は授業内で言えば Breakout session に導くための練習と Breakout session の監督となっている。

具体的には、例えば発音が終わって教科書の第2課に入ったばかりの第9回目(2021年5月13日(木曜日))と第10回(2021年5月18日(火曜日))では以下のような授業が行われている。

第9回目(2021年5月13日(木曜日))の授業内容

大教室で集合

1. 導入5分
2. 復習(教科書の順に確認)(15分)
 - ・発音、【練習1】～【練習6】
 - ・数人に当てて練習

小教室での練習(【練習】部分)(10:45目安)

3. 全員の名前を一通り読む。
4. Breakout session によるペアワーク(5分)
5. 【練習1】～【練習6】
6. Breakout session によるペアワーク(5分)

大教室へ移動(11:15目安)

7. 第2課【練習7】以降の説明。名前を入れた練習。

小教室へ移動(11:30目安)

8. 簡単な段取りの説明後、Breakout session によるペアワーク(4分)
9. 数人に当てて確認(約5分あけて breakout 再作成ができるのを待つ)。

10. 可能であれば Breakout session (4分) をいれる
大教室へ (11:55)
整理とまとめ

第10回目 (2021年 5月18日 (火曜日)) の授業内容

●大教室で集合10:30
1. 導入, 復習:
数人に当てて練習
復誦【練習1】～【練習7】
●小教室での練習 (10:45目安)
2. 導入で足りないと判断されたところを重点的に復習
3. Breakout session によるペアワーク (5分)
4. 復誦【練習1】～【練習7】, 名前など
6. Breakout session によるペアワーク (5分)
●大教室へ移動 (11:15目安)
7. 第2課【練習8】以降の説明, 名前を入れた練習, 第3課の説明と練習
●小教室へ移動 (11:30目安)
8. Breakout session によるペアワーク (5分)
9. 数人に当てて確認 (約5分あけて breakout 再作成ができるようになるのを待つ)
10. 可能であれば Breakout session (5分) をいれる
大教室へ (11:55)
整理とまとめ

教材の【練習1】～【練習8】は以下のような内容であり, ペアワークでは自分の名前を言う練習, 自己紹介の練習が繰り返し行われていることになる。まだ個別の状況は名前程度で単調な会話ではあるが, クラスメートの名前を覚えることが中国語学習にとって有用であることは授業内に伝えてあり, 熱心に覚えている学生も少なくはなかった。

教材中の対話練習の内容 (【練習1】～【練習8】部分)

【練習1】

—你好! Nǐ hǎo! / こんにちは。

—老师好! Lǎoshī hǎo! / 先生こんにちは。

你好! Nǐ hǎo 你们好! Nǐmen hǎo! 大家好! Dàjiā hǎo! 同学们好! Tóngxué men hǎo! 早上好! Zǎoshang hǎo! 晚上好! Wǎnshang hǎo! 早! Zǎo!

【練習2】

—认识您, 我很高兴。Rènshi nín, wǒ hěn gāoxìng. / お知り合いになれてとてもうれしいです。

—认识您, 我也很高兴。Rènshi nín, wǒ yě hěn gāoxìng. / お知り合いになれて私もとてもうれしいです。

【練習3】

—请多关照。Qǐng duō guānzhào. / どうぞよろしく。

—请多关照。Qǐng duō guānzhào. / どうぞよろしく。

【練習4】

—辛苦了。Xīnkǔ le. / ご苦労様でした。

—哪里哪里。Nǎli nǎli. / どういたしまして。

【練習5】

—再见！Zàijiàn! / さようなら。

—再见！Zàijiàn! / さようなら。

再见！Zàijiàn! 回头见！Huítóu jiàn! 明天见！Míngtiān jiàn! 下（个）星期见！Xià (ge) xīngqī jiàn!

【練習6】

—请问，您贵姓？Qǐng wèn, nín guìxìng? / お尋ねしますが，お名前はなんとおっしゃいますか？

—免贵，我姓田中，叫田中一郎。Miǎnguì, wǒ xìng Tiánzhōng, jiào Tiánzhōng Yīláng. / 私は田中です。田中一郎と申します。

【練習7】

—他叫什么名字？Tā jiào shénme míngzi? / 彼はなんとと言う名前ですか？

—他叫田中一郎。Tā jiào Tiánzhōng Yīláng. / 彼は田中一郎といいます。

【練習8】

—对不起。Duìbuqǐ. / ごめんなさい。

—没关系。Méi guānxi. / だいじょうぶですよ。

以上のような授業進行で8月3日までの合計で28回（試験を入れて60時間相当，実質は42時間）の授業が行われた。第9課までを終えることができ，発音記号のピンインの読み書き，中国語の動詞，名詞，形容詞から数詞を使った表現まで，基本的な文型の学習が終わったばかりというところではあったが，最後の授業での教員からの質問と会話練習の内容は以下のような難度であった。多くの学生は的確なやり取りができ，平均的なレベルで自己紹介から基礎的な受け答えができるレベルにまで達していたことは授業中に撮影されたビデオでも確認できる。

2021年7月末の授業導入の会話練習で使用された質問内容

你有兄弟姐妹吗？ あなた兄弟姉妹はいますか？
你哥哥是大学生吗？ あなたのお兄さんは大学生ですか？
他也学习汉语吗？ 彼（お兄さん）は中国語を学んでいますか？
你姐姐星期几打工？ あなたのお姉さんは何曜日にアルバイトをしていますか？
忙不忙？（お姉さんは）忙しいですか？
你弟弟喜欢吃咖喱饭吗？ あなたの弟はカレーが好きですか？
你妹妹参加俱乐部活动吗？ あなたの妹は部活に参加していますか？
她和谁一起参加？ 彼女（妹）は誰と参加していますか？
你爸爸忙不忙？ あなたのお父さんは忙しいですか？
你爸爸每天几点回家？ あなたのお父さんは毎日何時に帰ってきますか？
你妈妈呢？ あなたのお母さんはどうですか？
你爷爷身体好吗？ あなたの御爺さまは御加減いかがですか？
你奶奶怎么样？ あなたの御婆さまはいかがですか？
他们每天几点起床？ 彼ら（御爺さま御婆さま）は何時に起きますか？
你姥爷今年多大？ あなたの御爺さま（母方）は今年御幾つですか？

你知道吗？ あなたは（御歳を）知っていますか？
你姥姥的生日几月几号？ あなたの御婆さま（母方）の誕生日はいつですか？
她是一个什么样的人？ 彼女（御婆さま）はどのような方ですか？

（下線部は臨機応変に変更可）

中にはモチベーションの高い学生も多くみられ、夏のオンライン中国語中国文化研修（首都師範大学）にはインテンシブクラスに交じって参加した学生も2名見られ、それなりに高い教育効果が見られたが、問題点もいくつか見られた。

最大の問題点は、ビデオ会議システムでは出席しているが聞いていない学生（居留守型）、授業は聞いているがペアワークになると退出する学生（敵前逃亡型）、そのいずれかで結果的に授業についてこられなくなりペアワークできなくて困る学生（凍結型）など、いずれも一般的な授業ではよく見られるタイプの学生が我々の授業でも複数現れたことになる。もともとそうした学生をなくすために復誦、シャドーイング、ペアワークといった授業参加を促す技法を多く取り入れたはずの筆者の数年来の授業改善であったが、オンライン授業になったためにまた出現したというのは厄介な問題だった。この点については改善方法を検討しなければならないであろう。現時点で考えられる改善方法の一つに、「国際交流スキルアップ演習」履修者として参加する中国人留学生の増加があり、そこに期待が高まる場所である。そうした学生を日本人学生数名あたりに配置することにより、よりきめ細かな教室運営が可能となり、かつ国際交流も進むのではと思うからである。現在進行中の「インテンシブ実験クラス」ではTAの他に60名あたりに9名の学生が10月より参加しており、そうした問題に対する効果が見られていることは現場ですでに実感されている。

6. 学習効果の検証

語学学習の成果を数値で表すことは難しく、ここで客観的な数値によってそれを示すことができないことは極めて遺憾である。しかし、授業開始の導入の段階で個別の学生と会話を行った時、前の節であげた質問に対し、ほとんどの学生が速やかに回答することができていたことは事実である。また試験はリスニングと筆記による試験を行ったが、リスニング試験の得点も高得点を取る学生が多かったことは、会話の練習が功を奏していると推測できた。

とは言え、今年度の授業改善による成果があったことを、より客観的に示すために、ここでは学生による授業評価アンケートの結果についてとりあげる。これにより少なくとも従来の教育との学生のモチベーションの比較をすることは可能であろう。語学教育において学生のモチベーションの持続がいかに重要であるかは説明するまでもないであろう。

広島大学では、学期ごとに授業評価アンケートを行っている。以下ではコロナ前の2019年度から2021年度の3年間におけるベーシック中国語の前期理工系クラス中心の数値である。

年度により質問項目が若干増減するが、同じ質問をしている問いの中で、ここでは「どのくらいの割合でこの授業に出席しましたか」、「質問や発言などにより、授業に積極的に参加しましたか」、「この授業に関連する授業時間外の学習（予習、復習、課題等）に週平均でどの程度の時間を使いましたか」、「この授業から知識、技能などを身に付けることができましたか」、「総合的に判断して、この授業に満足しましたか」などと最後に2020年度と2021年度の部分で「通常の対面授業と比較して、オンライン授業はどのように感じましたか」についても見てみたい。

なお、統計学的に言えば回答率、有効回答数などにまで詳細に検討しなければならないが、あくまでも大学で集計され、学内で公表されている数値を利用した概ねの傾向を提示するのみということでご容赦いただきたい（実際に第1タームと第2タームでは回答率が減少しているという現実はここに指摘しておく）。「教育組織平均」とは広島大学全学の平均値であり、「同授業変更前」というのは同じベーシック中国語科目の中で、同時間に行われてきた同一の授業（2021年度も継続中の実験クラスを含む）、「同授業変更後」は、今回の改革により変更した実験クラスの数値である。

まず「どのくらいの割合でこの授業に出席しましたか」と「質問や発言などにより、授業に積極的に参加しましたか」、「この授業に関連する授業時間外の学習（予習、復習、課題等）に週平均でどの程度の時間を使いましたか」について見てみたい。表4は、学生の自己申告で、出席率100-90%を5、89-80%を4、8割未満～7割以上を3、7割未満～6割以上を2、6割未満を1で評価した数値の平均である。これを見ると出席率から見た学生のモチベーションという点ではいずれもほとんど差異を見出すことができない。強いて言えば第2タームになると出席率が落ちる傾向を現場では感じるが、アンケート上の数値としては見えてこない。出席率の悪い学生はアンケートに回答していないという実態もあるように予測される場所である。

表4 「どのくらいの割合でこの授業に出席しましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	4.88	4.90	—
2019年度2T	4.79	4.75	—
2020年度1T	4.92	4.90	—
2020年度2T	4.90	4.88	—
2021年度1T	4.95	4.85	4.93
2021年度2T	4.90	4.86	5.00

次に表5の積極性に関する質問では、総じて多くの場合で大きくは変わらないが、第2タームに積極性が減少するという傾向がみられる。「同授業変更前」のコロナ禍の中で初めてオンラインが試みられた2020年と、2021年度の「同授業変更後」つまり実験クラスでは現象が見られていない。数値に関しては、質問に関して「強くそう思う」を5、「そう思う」を4、「どちらともいえない」を3、「そう思わない」を2、「全くそう思わない」を1として集計した平均値である。

表5 「質問や発言などにより、授業に積極的に参加しましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	3.57	4.47	—
2019年度2T	3.57	4.17	—
2020年度1T	3.15	3.43	—
2020年度2T	3.33	3.55	—
2021年度1T	3.49	3.65	4.34
2021年度2T	3.54	3.00	4.35

表4、表5の傾向は表6でも同様に見られていて、平均的に第2タームになると授業時間外での学習時間にも影響している。モチベーションが低下しているか、授業以外の活動（クラブ活動やアルバイト）が充実し始め、或いは授業内で完結させようという意識が学生に働くようになっていのではないかとと思われる。とは言え、表4から表6に至るまで、一般的理解の範囲内で、極端な変化はみられていないと言ってよいかもしれない。我々の実験授業について一言加えておくと、もともとの授業設計が授業内でのタスクが最も重要であり、授業内で完結できるメソッドとして開発されていることから、学生の緊張感がほどけてきて楽に授業に参加できるようになっている部分もあると思われる⁸⁾。数値に関しては、質問に関して「3時間以上」を5、「3時間まで」を4、「2時間まで」を3、「1時間まで」を2、「全くしていない」を1として集計した平均値である。

表6 「この授業に関連する授業時間外の学習（予習、復習、課題等）に週平均でどの程度の時間を使いましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	2.46	3.12	—
2019年度2T	2.54	3.41	—
2020年度1T	2.76	3.27	—
2020年度2T	2.85	3.13	—
2021年度1T	2.69	3.61	3.73
2021年度2T	2.60	3.28	3.14

最も注目していただきたいのが表7と表8である。中国語を教育するうえで、学生が技能を身につけることができるか否かは、教育に対する学生の信頼感を表すものであり、学生が継続的に学ぶためのモチベーションにつながるものと考えている。この点においては「同授業変更後」では、平均を上回ることができ、第2タームではさらに飛躍的に向上させることができた。第1タームでは中国語の発音が中心であり、学生の立場からはそれほど目立った上達を感じなかったものが、第2タームになり、会話練習が中心となり、聞き・話す時間が増えたために上達していることを実感できた結果ではないかとと思われる。なお表7の数値は、質問に関して「強くそう思う」を5、「そう思う」を4、「どちらともいえない」を3、「そう思わない」を2、「全くそう思わない」を1として集計した平均値である。

表7 「この授業から知識、技能などを身に付けることができましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	4.13	4.37	—
2019年度2T	4.06	4.17	—
2020年度1T	4.21	4.20	—
2020年度2T	4.17	4.10	—
2021年度1T	4.32	4.23	4.44
2021年度2T	4.31	4.17	4.71

次の表8は学生の満足度である。教育組織の平均は4.2程度と見てよいと思う。それと比べた場合、「同授業変更前」でも平均的か高い数値をあげていることはわかるが、「変更後」では、とくに第2タームで飛躍的に向上していることがわかる。前の表7の場合のように、第2タームになって実感が増したことと関係があると推測される。表8の数値は、上と同じで質問に関して「強くそう思う」を5、「そう思う」を4、「どちらともいえない」を3、「そう思わない」を2、「全くそう思わない」を1として集計した平均値である。

表8 「総合的に判断して、この授業に満足しましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	4.02	4.35	—
2019年度2T	3.98	4.03	—
2020年度1T	4.02	4.17	—
2020年度2T	4.02	4.08	—
2021年度1T	4.19	4.27	4.39
2021年度2T	4.22	3.85	4.79

最後に、こうした実験授業がオンラインで行われていることもあり、同授業のオンライン授業に対する学生の反応を見るために、「通常の対面授業と比較して、オンライン授業はどのように感じましたか」の問いについても数値を見てみたい。これは質問に関して「とても良い」を1、「少し良い」を2、「対面授業と同等」を3、「少し良くない」を4、「全く良くない」を5、「すべて対面授業だった（もしくはすべてオンライン授業だった）ので比較できない」を6として集計したものである。ここでは本授業がオンラインで行われたことの評価ということで、6を外して集計したものは表9である。これに拠れば数値が少ない方がオンライン授業に好意的なことを表すことになる。

表9 「通常の対面授業と比較して、オンライン授業はどのように感じましたか。」

	教育組織平均	同授業変更前	同授業変更後
2019年度1T	—	—	—
2019年度2T	—	—	—
2020年度1T	—	2.53	—
2020年度2T	—	2.44	—
2021年度1T	—	1.94	2.27
2021年度2T	—	3.28	1.20

第2タームになると学生の意識や生活が変わっている中で、オンライン授業に対する学生の意識も表9のように変わっていることがわかる。全学の数値が不明なので、「同授業変更前」との比較によるしかないが、これにより、今回の実験授業がオンラインで行われつつも、学生の期待に添えるものであったことをある程度知ることができるのである。

7. まとめ

以上のように、2021年度広島大学でのコロナ禍のオンライン授業の中での初修外国語教育の新たな取り組みとして、TA (Teaching Assistant) 制度と教養教育科目 [国際交流スキルアップ演習] を活用した新たな授業形態を提案し、実践した。結果的に、一クラスの学生数を100名以上の規模にまで増やしつつも、多くの留学生を教員或いは教育補助員、授業参加者として授業内に配置することにより、学習者の中国語との接触機会は格段に増加し、学習者の外国語で会話する機会を向上させることに成功したと言える。大人数クラスは、語学の授業には不向きとされてきたが、それをTA制度の活用と留学生教育を両立させることにより、より効果的な授業を提供できる可能性をここに示すことができたと考えられる。

語学教員の不足は地方大学では深刻な問題になりつつある。また大学の経営上、少人数クラスの維持が難しくなっているとの議論も聞こえてくる中で、留学生教育と融合させた形での新たな教育モデル、教育効果も飛躍的に向上するモデルとして、さらに調整を続けていきたいと考える次第である。また中国語ばかりでなく、外国人への日本語教育との組み合わせによる相互学習も検討の段階に入っており、他の言語教育にまで応用可能となるようさらなる調整と挑戦をしていきたいと考える次第である。

注

- 1) 2020年度の試みについては拙稿「大学中国語におけるオンライン教育の試みー covid-19下の2020年度広島大学インテンシブ中国語連動クラスを中心にー」を執筆し、森戸国際高等教育学院「第7回 ICTによる日本語教育を考える会」で発表し原稿全文を公表している。修正版は近刊予定。
- 2) こうした技術を活用し、早くも2020年8月1日にはオンラインで国際研究集会「敦煌と東アジアの信仰」(広島大学敦煌学プロヘクト研究センター主催)を開催し、ビデオ編集による学会発表の新たな形を試みている。2020年9月には広島大学では初となるオンラインによる海外短期研修「首都師範大学中国語中国文化研修」も実施されている。
- 3) 広島大学森戸国際高等教育学院では定例で「ICTによる日本語教育を考える会」を開催しており、2021年3月13日には第7回目が開催された。
- 4) 同上。
- 5) 2020年度の教育内容については、別稿がある。『森戸国際高等教育学院紀要』第4号参照。
- 6) 参照 HIRODAI TA って何? | 広島大学 TA 制度「HIRODAI TA」(hiroshima-u.ac.jp)
- 7) 森戸国際高等教育学院3+1プログラムを含め、森戸国際高等教育学院の活動については拙稿「広島大学森戸国際高等教育学院とその新たな取り組み」(『スーパーグローバル大学創成支援事業による広島大学の教育力・研究力強化(Ⅱ)』, 67-86頁, 2020年3月)を参照。
- 8) 拙稿「明海大学の新中国語教育システムについて」, 『応用言語学研究』第10号, 187-202頁, 2008年; 「初修中国語教育改善への一提案」, 『応用言語学研究』No.13, 61-78頁, 2011年。

ABSTRACT

Teaching Chinese During the Coronavirus Pandemic in 2021: Improving Classes by using Hiroshima University's Teaching Assistant System

Hiroshi ARAMI

Graduate School of Humanities and Social Sciences

Hiroshima University

At the Institute for Foreign Language Research and Education, there has been a strong focus on developing systems that enable students to learn foreign languages and cultures more effectively during their student lives. For many years, the institute has organized intensive courses in German, French, Spanish, Chinese, and Korean, in which students have four class periods (eight hours) per week. Offered in the second year, the Trilingual Program has been established, and students who finish the course can obtain a certificate upon graduation. This program was launched in the 2018 academic year, and has succeeded in encouraging students to continue their studies in two foreign languages (the number of students completing the first term in the 2020 academic year was 28). The goals for “trilingual” completion (CEFR-level B1 for German, French, Spanish, and Korean; C1 for Chinese) have almost been achieved, so that the program has been a success for those who have joined it and provides good opportunities for language learning, particularly in a university that has no specialized school of foreign languages.

One problem is that of the 2,500 students who enter the university each year, only a small number of students take the foreign language intensive course, at around 100 participants, and the numbers of students who proceed to the trilingual course are smaller: 63 in 2018, 104 in 2019, and 56 in 2020. For students of science, the first-year intensive course is problematic due to timetabling, and this subsequently makes it difficult for them to advance to the Trilingual Program. Also, there are some challenges concerning the foreign language classes which need to be addressed, and this is the main focus of this paper.

In order to improve the Chinese classes, changes were made in 2021. The main way of improving the classes was to use the university's teaching assistant (TA) system. This has been used to place international students in the classes as teachers and teaching assistants to increase the opportunities for students to interact with first-language Chinese speakers. The aim has been to aid students in developing their communication skills in Chinese. This paper explores the process and results of this innovation.